

龍馬と学ぼう

日商簿記2級

日商簿記2級フリーテキスト講座

<工業簿記5> 部門別計算

全7枚



無料講座

月に一回

質問も無料ぜよ



最近の出題事例

129 : 12点は簡単

差異分析の仕訳は難

130 : 勘定の流れ押さえないと難

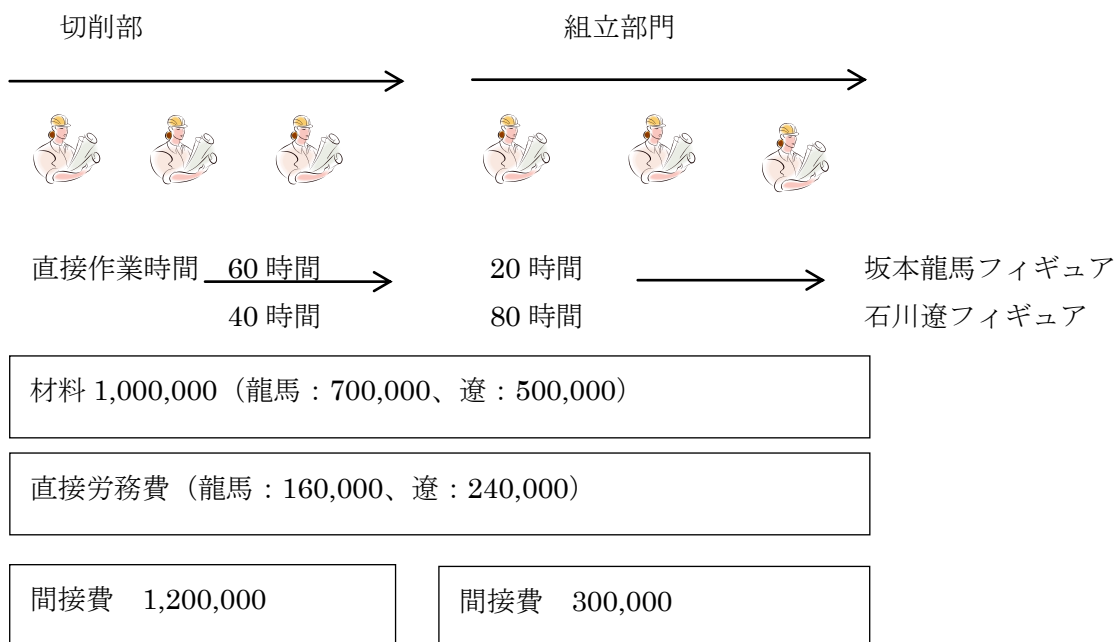
135 : 満点とりやすい

弥生カレッジCMCのフリーテキスト講座（無料動画で公開中）

無料動画はお持ちのテキストの該当の章を読んだうえで視聴して下さい

1. 部門別計算を行う意味

まずは下の図を確認して下さい。



これを前回のような基準（直接作業時間）で間接費配賦すると

$$\text{間接費 } 1,500,000 \div 200 = @7,500$$

$$\text{龍馬 : } 7,500 \times 80 = 320,000、\text{遼 } 7,500 \times 120 = 480,000$$

	坂本龍馬フィギュア	石川遼フィギュア	合計
材料費	700,000	500,000	1,200,000
労務費	160,000	240,000	400,000
製造間接費	600,000	900,000	1,500,000
合計	1,460,000	1,640,000	3,100,000
完成品数量	1,000	1,000	
完成品単位原価	1,460	1,640	
売価(2割乗せ)	1,752	1,968	

この資料を元に取り締役会を開き、営業部でローラー作戦を実施しました。

でも石川遼 f は売れず、坂本龍馬 f は売れまくりました。

なのに、経営（資金繰）は苦しくなるばかり

なぜ、こんな結果になったのでしょうか？

ここに部門別原価計算の必要性があるのです

さきほどの原価計算を部門別に計算してみましょう

間接費の計算がかわります（直接費は龍馬・遼ともに計算方法はかわりません）

<切削部門>の間接費の配賦

$$1,200,000 \div 100 = @12,000$$

$$\text{龍馬 } 12,000 \times 60 = 720,000$$

$$\text{遼 } 12,000 \times 40 = 480,000$$

<組立部門>

$$300,000 \div 100 = @3,000$$

$$\text{龍馬 } 3,000 \times 20 = 60,000$$

$$\text{遼 } 3,000 \times 80 = 240,000$$

これで原価計算表を作ると

	坂本龍馬フィギュア	石川遼フィギュア	合計
材料費	700,000	500,000	1,200,000
労務費	160,000	240,000	400,000
製造間接費（切削）	720,000	480,000	1,200,000
製造間接費（組立）	60,000	240,000	300,000
合計	1,640,000	1,460,000	3,100,000
完成品数量	1,000	1,000	
完成品単位原価	1,640	1,460	
売価(2割乗せ)	1,752	1,968	

競合他社が石川遼を 1,752 円で販売していると勝てません！！

競合が坂本龍馬を 1,968 円で販売していると勝てますが、ほとんど利益はあがりません。

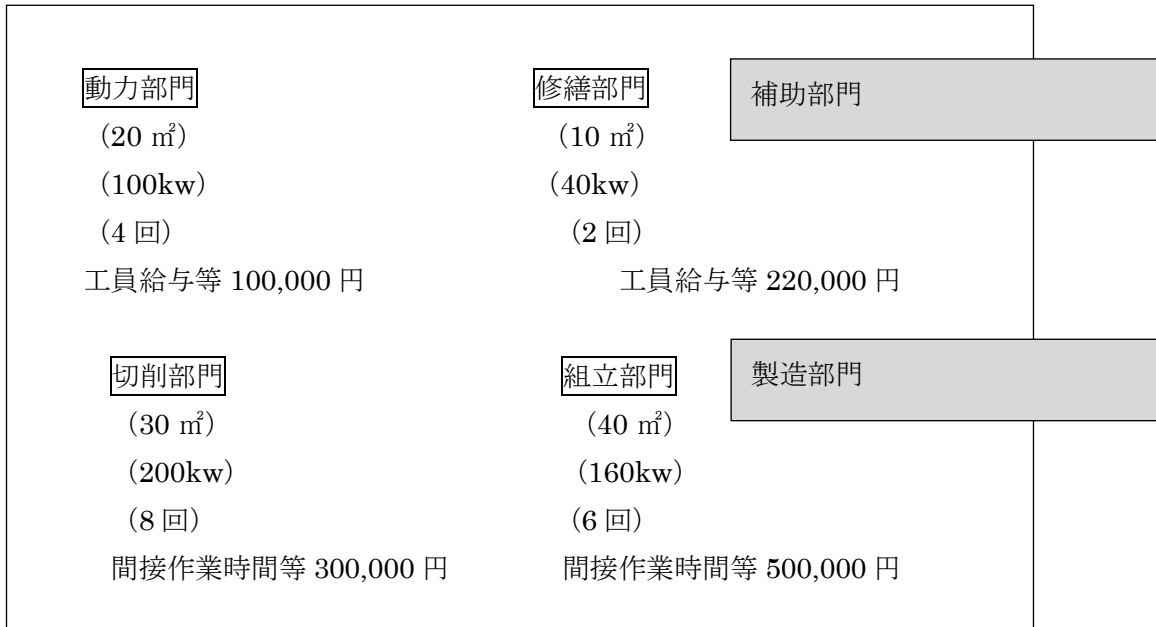
石川遼が在庫になって、トータウ利益は赤字になります。

このように、できるだけ真実の原価に近づけるための方法が部門別計算なのです

2. 部門別計算をイメージしよう

テキストは読まれていると思います。基本的な事は動画で解説します。
イメージを持つことが大切です。さきほどの計算はクリアしましょう。

部門共通費 <工場（家賃 1,000,000） 電気代（300,000）>



では部門別原価計算表を作ってみましょう（まずは直接配賦法）

摘要	合計	切削部門	組立部門	動力部門	修繕部門
部門個別費	1,120,000	300,000	500,000	100,000	220,000
部門共通費					
減価償却費	1,000,000	300,000	400,000	200,000	100,000
水道光熱費	300,000	120,000	90,000	60,000	30,000
部門費	2,420,000	720,000	990,000	360,000	350,000
動力部門	360,000	200,000	160,000		
修繕部門	350,000	200,000	150,000		
製造部門費	2,420,000	1,120,000	1,300,000		

大丈夫ですね。直接製造している部門だけで配分するのでから直接配賦法です。

では、石川遼フィギュアと坂本龍馬フィギュアにかかった間接費を配賦しましょう

当月の直接作業時間は下記の通りです

	切削部門	組立部門
坂本龍馬	500 時間	600 時間
石川遼	620 時間	700 時間

では間接費の計算をしましょう

	切削部門	組立部門	合計
坂本龍馬	500,000	600,000	1,100,000
石川遼	620,000	700,000	1,320,000

3. 部門別の予定配賦

近藤管理部長から「製造間接費を部門別に管理したのはいいが、予定配賦できなくなったではないか！」とお叱りの声。工場長のあなたは、「やってやろうじゃねえか」とタンカをきりました。

では、頑張りましょう。少し難しいですが、これを突破すれば、2級の第4問は制覇したも同然です。

例えば、下記の部門別予算管理表が事前に設定されていたと仮定します

摘要	合計	切削部門	組立部門	動力部門	修繕部門
部門個別費					
部門共通費	細かい計算は省略しています。 合計の製造部門費のみ掲載しています				
減価償却費					
水道光熱費					
部門費					
動力部門					
修繕部門					
製造部門費		12,000,000	14,400,000		
直接作業時間		9,600 時間	18,000 時間		

そうすると、部門毎の予定配賦率が出せますね

切削部門 = $12,000,000 \div 9,600 = @1,250$ 円

組立部門 = $14,400,000 \div 18,000 = @800$

予定配賦するの
だ



そうすると、予定配賦はどうなるでしょうか？

	切削部門	組立部門
坂本龍馬	500 時間	600 時間
石川遼	620 時間	700 時間
合計時間	1,120 時間	1,300 時間
予定配賦率	1,250 円	800 円
予定配賦額	1,400,000	1,040,000

仕訳は

仕掛品 2,440,000 / 切削部門費 1,400,000
組立部門費 1,040,000

実際は先の計算 (P4) の通り、切削部門は 1,120,000、組立部門は 1,300,000 でした。

今度は土方管理部長が登場

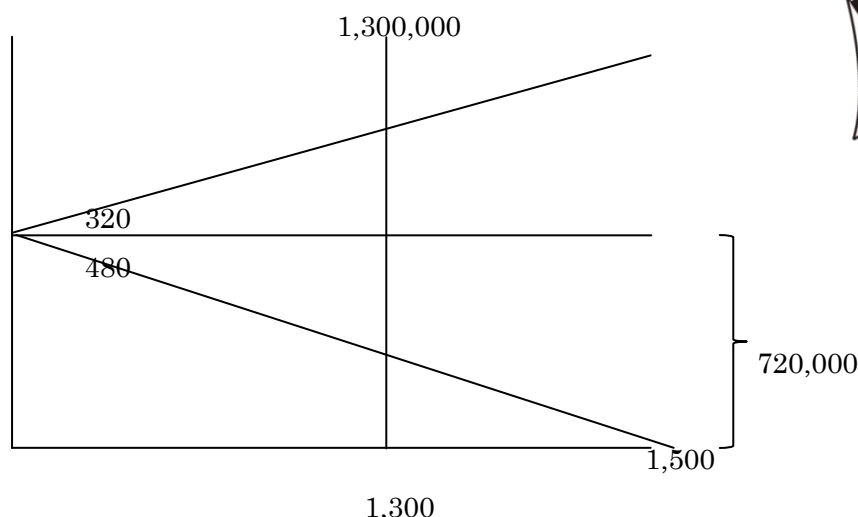
「組立部門！ 予算オーバーしすぎだ！ 差異分析しろ！」

工場長は、組立部門の変動費と固定費を洗い出しました

	予算	実績
変動費	480,000	1,300,000
固定費	720,000	

差異分析するの
だ

組立部門予算のうち 40% が変動費である



$$\text{予算差異} = 320 \times 1,300 + 720,000 - 1,300,000 = -164,000$$

$$\text{操業度差異} = (1,300 - 1,500) \times 480 = -96,000$$

やっと一息。来月に向けての組立部門の改善策を考えていると、とどめの沖田管理係長が登場

「もっと精度の高い方法で実際の計算をしろ」との事で、各補助部門間のやり取りを計算に含めろ、との事でした。これを相互配賦法といいます。

では、やってみましょう

摘要	合計	切削部門	組立部門	動力部門	修繕部門
部門個別費	1,120,000	300,000	500,000	100,000	220,000
部門共通費					
減価償却費	1,000,000	300,000	400,000	200,000	100,000
水道光熱費	300,000	120,000	90,000	60,000	30,000
部門費	2,420,000	720,000	990,000	360,000	350,000
第1次配賦					
動力部門	360,000	180,000	144,000	-	36,000
修繕部門	350,000	140,000	105,000	105,000	-
第2次配賦				105,000	36,000
動力部門	105,000	58,333	46,667		
修繕部門	36,000	20,571	15,429		
製造部門費	2,420,000	1,118,904	1,301,096		

※端数処理は四捨五入とする

P4の計算と比べて下さい。

相互配賦法は厳密な方法ですが、結果的には製造部門費に大きな差はでませんでした。従って実務では圧倒的に直接配賦法が使われていました（現在はシステム化で、より厳密な方法がつかわれています）



切れ味の良い計算をしましょう

原価計算表の合計欄（左側）には通常配点はきませんので、完全に覚えなくても大丈夫です。

作問者が問いたいのは、計算プロセスがあっているかと、最後の部門費合計（一番下の各部門費の金額）です。

あまり神経質にならないようにしましょう。